

松山 能登の教訓継承 思い新たに NPO法人 高校生ら活動報告



かんきつを被災地に届けた支援活動を紹介する
参加者—14日午後、松山市北持田町

能登半島地震の被災地訪問や支援活動を行ったチームのメンバーによる報告会が14日、松山市北持田町の県生活文化センターであった。参加者約30人が教訓と記憶を継承する大切さについて思いを新たにした。

東日本大震災の避難者らでつくるNPO法人「えひめ311」が主催した。能

登半島地震被災者支援の「チーム愛媛」を2024年2月に結成。松山学院高校の生徒や教員、愛媛大の学生、各種団体が所属し、炊き出しやかんきつの提供、餅つき大会開催などに取り組んできた。

松山学院高校教員の菅遼さん(37)は2024年3月、25年2月に3回、石川県輪

島市の避難所や仮設住宅などを訪れ、メンバーと交流カフェを開いた。「炊き出し会場では、ただ誰かに話を聞いてほしくて足を運ぶ人の方が多かった」と報告。仮設住宅にいた高齢者は家から出ず孤立しがちだとし「外出の機会を失えば社会とのつながりも失う。幅広い世代が楽しく過ごせるイベントをこれからも企画したい」と意欲を示した。

同校の生徒は、夕涼み会で五色そうめんを提供し、被災者は楽しんでいたものの「言葉の端々に、つらく苦しい記憶があふれていた」と複雑な心情を語った。えひめ311の渡部寛志代表(46)は「東日本大震災から14年がたち、悲惨さを知らない世代が増えた危機感がある。被災地の今を後世に伝えるために何ができるか考え続けたい」と話した。

(森満里子)